史跡名勝天然記念物の指定等

《史跡の新指定》　９件

１　十五郎穴横穴群（じゅうごろうあなよこあなぐん）【茨城県ひたちなか市】

十五郎穴横穴群は、関東平野の北縁、太平洋に東流する那珂川（なかがわ）の支流である大川（おおかわ）と本郷川（ほんごうがわ）に挟まれた舌状台地南端部に位置する横穴墓群である。崖面に造られた横穴墓群は、大きく３つの支群に分けられ、北端台地は「指渋支群（さしぶしぐん）」、南側台地は「館出支群（たてだししぐん）」、西方台地は「笠谷支群（かさやしぐん）」と呼ばれている。

横穴墓は、これまでの調査で２７４基が確認されており、未知のものも含めると、総数５００基以上と推測されている。各支群の造営が７世紀前葉に始まったことが玄室構造から判明している。また、７世紀前葉から８世紀まで造られた横穴墓が、９世紀前葉まで追葬で使用されていることも確認された。古墳時代終末期から平安時代初頭に至るまでの集団の展開過程を知る上で重要である。

各支群の台地上には、首長墳（しゅちょうふん）が横穴墓と密接な関係をもって展開する。指渋支群では、台地上で最初の前方後円墳である史跡 虎塚古墳（とらづかこふん）の築造とほぼ同時期に横穴墓が造られるのに対し、館出支群では古墳は築造されず、後背墳丘（こうはいふんきゅう）をもつ横穴墓が造られる。笠谷支群では最初の前方後円墳である笠谷第６号墳に後続する笠谷第７号墳とほぼ同時期に横穴墓の造墓が開始する。この多様さは、横穴墓の造墓集団と首長層の関係や、造墓集団間の関係を考える上で重要である。

十五郎穴横穴群は、７世紀前葉に造営が始まり、９世紀前葉まで追葬で使用された東日本最大級の横穴墓群であり、古墳時代終末期から平安時代初頭の東日本社会を考える上で重要である。

２　姉小路氏城跡（あねがこうじししろあと）【岐阜県 飛騨（ひだし）市 】

古川城跡（ふるかわじょうあと）
小島（こじま） 城跡（じょうあと）
野口（のぐち） 城跡（じょうあと）
向小島城跡（むかいこじまじょうあと）
小鷹利城跡（こたかりじょうあと）

姉小路氏城跡は、１４世紀後葉に飛騨国司となった 藤原北家（ふじわらほっけ）出身の姉小路氏が、任国後に土着し 国人（こくじん）となり、古川盆地の要衝に築いた中世山城群である。飛騨国に赴任した姉小路氏は、盆地内の 古川郷（ふるかわごう）、小島郷（こじまごう）、小鷹利郷（こたかりごう）にそれぞれ拠点を持つ古川氏、小島氏、向（むかい）氏の三氏に分かれ各々の地域に山城を築いた。盆地南部の入口には古川城跡（標高６２４ｍ）、盆地中央部で街道を見下ろす小島城跡（標高６１７ｍ）、盆地北部

で越中方面と神岡方面の分岐点に野口城跡（標高５５８ｍ）、盆地西部では向小島城跡（標高６４６ｍ）、西部の山間部との境界に小鷹利城跡（標高７８７ｍ）が残る。各城は、１６世紀前葉以降、高山に進出した三木氏が北部の江馬氏等との争いにより改修、整備し、三木氏が古川盆地を制圧した１６世紀後葉には、古川城跡に石垣が築かれ、盆地内の各城が連動して盆地外へ向かって堀切等が築かれる。天正１３年（１５８５）に金森長近が飛騨国を侵攻し支配下に収めると古川城跡・小島城跡を改修し、他の山城は廃城となった。

国司から国人として定着した珍しい氏族である姉小路氏が築き、中世飛騨国の政治状況による改修の跡を残しており、当地の政治勢力の様相と変遷を知るために重要な山城群である。

３　三河国府跡【愛知県豊川市】

三河国府跡は、豊川市西部を南北に流れる西古瀬川と音羽川に形成された通称白鳥台地の先端付近に立地する古代三河国の国府跡である。国庁の正殿と考えられる石組雨落溝を伴う四面廂建物、後殿と考えられる東西棟の大型掘立柱建物、南西では西脇殿の可能性がある掘立柱建物、南東では東脇殿と考えられる長舎状の建物を確認した。これら国庁の主要建物はコの字形配置をとり、掘立柱塀で囲繞される。主要建物の配置や囲繞施設は、その成立から廃絶までの間に大きな変化は認められないものの、発掘調査の成果と出土遺物の検討から、主要建物は９世紀初頭から１０世紀中葉までの間に３期の変遷が認められる。出土遺物には蹄脚円面硯や「國厨」と墨書された９世紀代の須恵器、１０世紀中葉に廃棄された緑釉陶器製の陶印、緑釉陶器、製塩土器等、国府における文書行政、給食、饗応等に関係すると考えられる遺物がある。

三河国府の国庁が、コの字形の建物配置をとるようになるのは、９世紀初頭であり、その形状を踏襲しつつ１０世紀中葉に廃絶することが判明するなど、律令国家の地方支配の拠点となる国府の実態と変遷、さらには古代の地方支配の実態を知る上で極めて重要な遺跡といえる。

４　尾高城跡【鳥取県米子市】

尾高城跡は、出雲と西伯耆を結ぶ東西交通と、山間部と日本海をつなぐ南北交通の結節点に築かれた中世城館である。１３世紀から１４世紀の有力な在地領主の住居跡と考えられる四面廂付礎石建物から始まり、１５世紀には方形単郭や群郭の平城が築

かれ、１６世紀には大型の堀と土塁を巡らせた曲輪が整備され、さらに本丸、二の丸といった山城が整備されるなど増築を重ねた城郭である。１６世紀前半の城主は、山名一族の系統に連なる有力国人で西伯耆一帯を勢力下に置く幸松氏であった。尼子氏の侵攻により幸松氏は退去するが、尼子氏と毛利氏の攻防の地となり、尼子氏滅亡後は吉川広家が家臣に命じて、本丸の土塁と切岸を改変し石塁と北堀に石垣を設けた。関ケ原の戦い後は、中村一忠が米子城の完成まで尾高城に入る。慶長２０年（１６１５）の一国一城令により廃城となるが、転落した築石、崩落し堆積した栗石が本丸北堀の堀底に散乱しており、破城の痕跡を伝える。

城主の変遷と各段階での改修状況等が良好に残り、交通の要衝に位置し、空堀や土塁で形成される土の城から、一部に石垣を築いて築地塀を導入するなど近世城郭へ移行する様子、また、一国一城令による破城の状況も判明する重要な城郭である。

５　広島原爆遺跡【広島県広島市】

広島原爆遺跡は、第二次世界大戦の末期である昭和２０年（１９４５）８月６日に広島にアメリカ軍により投下された原子爆弾（以下「原爆」と略す。）の被害の実相を伝える遺跡である。爆心地から１．４ｋｍまでは人体に致命的な熱傷を与え、２ｋｍ以内では大半の建物が全壊全焼した。原爆による被害は、爆風、熱線、放射線が挙げられ、同年中に約１４万人が死亡したと推定されている。

旧燃料会館（現・平和記念公園レストハウス）は、地階には火災痕である煤のある天井や、爆風の影響で押し上げられたと推定される天井スラブが残る。旧日本銀行広島支店は爆風による地階の扉の蝶番の損傷や、２階の木製の腰壁には窓ガラスの破片が突き刺さった痕などが残る。旧本川国民学校校舎（現・本川小学校平和資料館）は炭化した木煉瓦や焼け焦げた戸枠・配電盤が残る。旧袋町国民学校校舎（現・袋町小学校平和資料館）は被爆後臨時救護所となった際に記された伝言や炭化した木煉瓦が残る。多聞院鐘楼は爆風によって損傷した天井や梁をそのまま残す。旧中国軍管区司令部防空作戦室は、当時勤労動員されていた高等女学校の生徒が、電話により四国軍管区司令部と福山の部隊に被爆直後に被害を伝えた場所である。

広島原爆遺跡は第二次世界大戦末期における原爆投下の歴史的事実と、人類史上初めて使用された核兵器の被害、戦争の非情さを如実に伝える遺跡である。

６　西条酒蔵群【広島県東広島市】

西条酒蔵群は、西条盆地北部に所在する旧西国街道の宿場町西条の、近世に始まり

近代に発展し、現在も続く全国屈指の酒蔵群である。西条では、文化２年（１８０５）には島家が酒造を行っていたことが記録に見え、明治２０年代末に行われた三浦仙三郎による軟水醸造法の確立、明治２７年（１８９４）の山陽鉄道の広島駅までの延伸、木村酒造場におけるいち早い動力式精米機の使用などにより、明治４０年（１９０７）には広島の酒が全国で認められるに至っていた。

指定を行おうとするのは、西条で最初期より酒造を行ってきた島家の白牡丹酒造の延宝３年（１６７５）建設とされる延宝蔵、木村酒造場の後継である賀茂鶴酒造の明治初期建設の一号蔵、昭和４年（１９２９）建設の旧広島県醸造試験場、当時の西條町長の発起で造られた西條酒造株式会社の後継会社である福美人酒造の、大正１４年（１９２５）に建設された西条で最大の酒蔵である大黒蔵である。

西条酒蔵群は、旧西国街道沿いの町家の背後に建てられた小規模な酒蔵から、近代以降町並みの背後の農地を利用した大規模な酒蔵へと発展していく様子を理解することができ、また、近代酒造業の拡大の変遷を追うことのできる歴史的に重要な酒蔵群である。

７　勝賀城跡【香川県高松市】

勝賀城跡は、高松市西端に所在し、瀬戸内海や高松平野を一望できる標高３６５ｍの勝賀山山頂に位置する中世山城である。北には港町の香西浦があり、香西浦の後背地には勝賀城跡の山麓居館と伝わる佐料城跡があり、在庁官人出身の系譜を持つ香西氏の拠点であった。香西氏は、室町時代には管領細川京兆家の内衆として、上京した「上香西」と讃岐に残った「下香西」に分かれ勢力を誇った。

勝賀城跡は、標高３２０ｍ付近から頂上までの讃岐岩質安山岩の分布範囲に城郭遺構が収まる。山頂部中央に堀切状の遺構と土塁を組み合わせた遺構があり、それを境に、北東部は尾根上に平坦部の曲輪が連なる連郭式の構造で、南西部は主郭及び全体に折れを伴った土塁が囲み、喰い違い虎口や方形曲輪など１６世紀後半に出現する新しい構造を持つ城郭遺構が見られる。主郭周囲では建物遺構や遺物がほとんど検出されず、恒常的な建物を建てない陣城的な性格が考えられ、時期について天正１３年（１５８５）の羽柴秀吉による四国攻めの際に、改修されたと想定される。

中世香西氏の拠点であった山城が羽柴秀吉の四国攻めに際して改修され、四国統一をめぐる戦乱の舞台となり、また、改修過程が遺構として残る重要な城跡である。

８　博多遺跡【福岡県福岡市】

福岡県福岡市博多区に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である博多遺

跡群のひとつで、中世の港湾に係る遺跡を指す。福岡市教育委員会が実施した発掘調査で、拳大から人頭大の石を幅１．２～１．６ｍ、高さ約６０ｃｍの列状に積み上げた護岸と考えられる石積遺構が約７０ｍにわたって検出された。時期は１１世紀後半から１２世紀前半に機能し、１２世紀中頃から後半の洪水堆積物で埋没している。当時の水際から６ｍほど陸側の砂丘末端から河川堆積層にかけて直線的に構築されており、海側の石材は面を強く意識している。その位置や構造から港湾施設と考えられる。また、これと同様の港湾施設が中国の 寧波 や 温州 で発掘されていることから、宋商人らが関与して構築されたと想定される。

石積遺構の周辺には石積遺構と同一の方向をとる同時期の遺構群が展開し、また 汀線 際に投げ捨てられた 白磁 一括廃棄遺構等が検出されていることなどから、宋商人の居住区である「筑前博多津唐房 」に関連する区画が付近に存在した可能性が示されている。出土遺物には、多量の貿易陶磁器片のほか、日宋貿易の主要な輸出品のひとつであった大分県 九重硫黄山 産や鹿児島県 硫黄島 産の硫黄が出土していることが注目される。

鴻臚館 に代わる新たな施設として１１世紀後半に造られた港湾施設で、中世のアジア規模での交易の内容やその担い手を示す重要な遺跡である。

９　菊池氏遺跡 【熊本県 菊池市 】

菊池氏遺跡は、熊本県北部、菊池 川 中流域に位置する九州を代表する中世武士団、菊池氏関連の 館跡 と宗教施設等からなる遺跡群である。菊池氏は、平安末の 肥後国 最有力武士、鎌倉時代には 鎮西 随一の 国御家人 、南北朝期には鎮西宮方勢力の主宰者、室町期の肥後国守護として、九州の中世史を体現する存在である。現在の菊池市の中心部は室町時代以降に菊池氏が本拠を置いた 隈府 にあたるが、初代 則隆 から１５代 武光 の間は、その南方にある 深川 ・北宮 地区に本拠が置かれていたと伝えられる。菊池市はこの地区に所在する菊池氏の本拠と伝えられる 北宮館跡 、菊池氏と水運との関係を示す 菊之池 Ｂ遺跡の調査を行い、前者では１３世紀の館跡に関係すると考えられる遺構を検出し、後者では１３世紀の河川護岸を検出した。これらに 応永 １０年（１４０３）に菊池 武朝 らが 神像 を寄進した 北宮 阿蘇 神社を加え菊池氏遺跡として史跡に指定する。

菊池氏遺跡は菊池氏の中世の本拠地の具体像を示す遺跡群であり、そこから中世武士団の領域経営の在り方を知ることができる。また、隈府の遺跡も併せ検討することにより、肥後国最有力武士から肥後国守護へと成長する過程を示す重要な遺跡群である。

《特別史跡の追加指定》　２件

１　藤原宮跡（ふじわらきゅうせき）【奈良県 橿原市（かしはらし）】

持統天皇（じとうてんのう）８年（６９４）から和銅（わどう）３年（７１０）まで営まれた古代の都城跡（とじょうあと）。藤原京跡の中心部に位置し、約１ｋｍ四方の区画内に内裏（だいり）、大極殿（だいごくでん）及び役所群が建てられた。今回、条件の整った区域を追加指定する。

２　高松塚古墳（たかまつづかこふん）【奈良県 高市郡（たかいちぐん） 明日香村（あすかむら）】

奈良県明日香村に所在する飛鳥時代末の直径約２３ｍの円墳。埋葬施設である切石積（きりいしづみ）の横口式石槨（よこぐちしきせっかく）の壁面には極彩色（ごくさいしき）の大陸風壁画が描かれており、律令国家成立期の葬送儀礼や東アジア世界との交流を考える上で極めて重要である。今回墳丘の一部について、条件の整った区域を追加指定する。

《史跡の統合・追加指定及び名称変更》　１件

１　総社古墳群（そうじゃこふんぐん）【群馬県 前橋市（まえばしし）】

遠見山古墳（とおみやまこふん）
二子山古墳（ふたごやまこふん）
愛宕山古墳（あたごやまこふん）
宝塔山古墳（ほうとうざんこふん）
蛇穴山古墳（じゃけつざんこふん）

群馬県中南部に所在する古墳群。５世紀後半から７世紀後半にかけて首長墳（しゅちょうふん）が連綿と築かれており、古墳時代から飛鳥時代の地域首長の動向やヤマト王権との政治的関係を知る上で重要。既指定の二子山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳を統合し、かつ、遠見山古墳、愛宕山古墳を追加指定し、総社古墳群に名称を変更する。

《史跡の追加指定及び名称変更》　３件

１　江馬氏城館跡（えましじょうかんあと）【岐阜県 飛騨市（ひだし）】

下館跡（しもやかたあと）
高原諏訪城跡（たかはらすわじょうあと）
傘松城跡（からかさまつじょうあと）
土城跡（どじょうあと）
寺林城跡（てらばやしじょうあと）

政元城跡
洞城跡
石神城跡

（傘松城跡を追加指定する）

飛驒国北部 神岡 周辺を本拠とする豪族江馬氏の城館跡。各城跡は交通の要衝に位置する。下館跡の正面に位置する傘松城跡は、標高８０３ｍにあり周囲の諸城を見渡し、堀切等西方へ防御を意識した配置である。江馬氏の領域支配を担った重要な城跡であり、追加指定する。

２　狭山池　附　池守田中家旧宅【大阪府 大阪狭山市】

（附 として池守田中家旧宅を追加指定する）

７世紀の築造以来、大阪南部の水源を担う狭山池を江戸時代に管理した池守が田中家である。江戸時代以来の池守田中家の屋敷地には、１８世紀前期頃の建造と推定される主屋が移築されずに現存し、長屋門や土蔵等も残る。江戸時代の狭山池やその水利管理を行った場所として、狭山池に附として追加指定する。

３　伊予 遍路 道【愛媛県 宇和島市、西予市、大洲市、松山市】

観自在寺 道
稲荷 神社 境内 及び 龍光寺 境内
仏 木寺 道
明石寺道
明石寺 境内
大寶寺 道
大寶寺 境内
岩屋寺 道
岩屋寺 境内
浄瑠璃寺 道
浄瑠璃寺 境内
八坂寺境内
浄土寺 境内
横 峰寺 道
横 峰寺 境内

三角寺 奥之院 道

（明石寺道、大寶寺道の一部及び八坂寺境内を追加指定する）

愛媛県内の遍路道の総称。四十二番札所仏木寺から四十三番札所明石寺に至る道である明石寺道のうち宇和島市域の一部、西予市・大洲市域の第四十四番札所大寶寺に至る大寶寺道、松山市に所在する第四十七番札所八坂寺境内を追加指定する。

《史跡の追加指定》　１７件

１　白河官衙遺跡群 【福島県 白河市 】

関和久官衙遺跡

借宿廃寺跡

福島県中通り地方南部に所在する官衙遺跡群。関和久官衙遺跡が古代白河 郡家 、借宿廃寺跡がこれに付属する古代寺院と考えられ、古代の地方支配体制を知る上で重要。今回、借宿廃寺跡のうち、講堂の 掘込地業 の北東隅部分とその隣接地について、条件の整った区域を追加指定する。

２　上野国佐位郡正倉跡 【群馬県 伊勢崎市 】

７世紀後半から１０世紀前半にかけて機能した上野国佐位 郡家 の 正倉 と考えられる遺跡。正倉は総面積６万㎡の全国でも最大級の正倉域を持ち、一角には「上野国 交替実録 帳 」で「八面甲倉 」と記載された建物に符号する総柱で八角形の礎石建物が形成され、上野国佐位郡家であることが決定づけられた。今回、条件の整った区域を追加指定する。

３　山野貝塚 【千葉県 袖ケ浦市 】

東京湾東岸（房総半島西部）に位置する縄文時代後期から晩期の大型 馬蹄形貝塚 。この地域に集中する大型貝塚群の中で、現存する事例としては最南端に位置する。現在でも馬蹄形の貝塚の形状をそのまま見ることができる。出土した魚類遺体は、東京湾東岸の中央部に位置する地理的特徴をよく表している。今回、条件の整った区域を追加指定する。

４　下総小金中野牧跡 【千葉県 鎌ケ谷市 】

江戸時代、幕府が軍馬育成のため設けた牧の遺跡であり、幕府による軍馬生産の様相を知る上で重要。放牧していた野馬を捕らえる「捕込」と呼ぶ施設と野馬土手から成る。今回、条件の整った区域を追加指定する。

５　下野谷遺跡【東京都西東京市】

墓と考えられる中央部の土坑群を取り囲むように、竪穴建物群と掘立柱建物群が直径１５０ｍの範囲で配置される。規模・内容とも南関東の同時期の集落では傑出しており、縄文時代中期後半の大規模な環状集落として重要。今回、条件の整った区域を追加指定する。

６　下寺尾官衙遺跡群【神奈川県茅ヶ崎市】

神奈川県東部に所在する相模国高座郡家と考えられる官衙遺跡群。郡庁・正倉は７世紀末から８世紀中葉まで２期にわたって変遷し、その南西部には七堂伽藍跡と呼ばれる寺院が所在している。今回、条件の整った区域を追加指定する。

７　下寺尾西方遺跡【神奈川県茅ヶ崎市】

弥生時代中期後半に営まれた環濠集落跡。出土遺物には土器のほか石器と鉄器があり、利器が石器から鉄器へと移行していく時期の在り方を示している。南関東における拠点集落であり、弥生時代中期社会の様相を知る上で重要。今回、条件の整った区域を追加指定する。

８　小島陣屋跡【静岡県静岡市】

興津川の河岸段丘上に位置する、宝永元年（１７０４）に建設された小島藩一万石の陣屋跡。地形に合わせて石垣で囲まれた曲輪が配置され、主郭には現在、指定地外に移っていた御殿を再移築中である。今回、指定地東側に位置する馬場跡の追加指定を行う。

９　山科本願寺跡及び南殿跡【京都府京都市】

浄土真宗中興の祖、八世蓮如が京都山科に造営し、御本寺、内寺内、外寺内の三重構造からなる寺内町を形成した。蓮如が没した南殿と御本寺部分の一部に加え、御本寺の中心部と、北西角部の土塁と外堀、江戸時代以降に山科本願寺の遺構を守り伝えた奥田家の屋敷地を追加指定する。

10　纒向古墳群（まきむくこふんぐん）【奈良県 桜井市（さくらいし）】

奈良盆地東南部に位置し、弥生時代終末から古墳時代初頭の定型化以前の前方後円形の墳丘を持つ５基から成る古墳群で、我が国の古代国家形成期の様相を知る上で重要。既指定の古墳２基のうち、纒向石塚（まきむくいしづか）古墳の一部で条件の整った区域を追加指定する。

11　大官大寺跡（だいかんだいじあと）【奈良県 橿原市（かしはらし）、高市郡（たかいちぐん） 明日香村（あすかむら）】

藤原京条坊（ふじわらきょうじょうぼう）の南東に位置する巨大な古代寺院跡。天武２年（６７３）に建立した高市大寺（たけちおおでら）を天武６年（６７７）に大官大寺に改称し、現位置には文武（もんむ）朝に移ったと考えられる。平城京 大安寺（だいあんじ）の前身寺院。金堂（こんどう）や講堂、塔、回廊の跡などが残る。今回、講堂跡や北面回廊跡の条件の整った区域を追加指定する。

12　中尾山古墳（なかおやまこふん）【奈良県 高市郡（たかいちぐん） 明日香村（あすかむら）】

飛鳥時代末の対辺長約１９．５ｍの八角墳（はっかくふん）。三段築成で一・二段目に基壇（きだん）状の石積を施す。埋葬施設は切石積（きりいしづみ）の横口式石槨（よこぐちしきせっかく）で、火葬骨が埋納されたとみられる。古墳文化の終焉と律令国家成立過程における墓制の変遷を知る上で重要。今回、墳丘外周の石敷の条件の整った区域を追加指定する。

13　飛鳥宮跡（あすかきゅうせき）【奈良県 高市郡（たかいちぐん） 明日香村（あすかむら）】

７世紀代に歴代の天皇の宮殿が造営された宮跡。発掘調査の結果、飛鳥岡本宮（あすかおかもとのみや）（舒明（じょめい）天皇）、飛鳥板蓋宮（あすかいたぶきのみや）（皇極（こうぎょく）天皇）、後飛鳥岡本宮（のちのあすかおかもとみや）（斉明（さいめい）天皇・天智（てんじ）天皇）、飛鳥浄御原宮（あすかきよみはらのみや）（天武（てんむ）天皇・持統（じとう）天皇）の各期の遺構が確認された。今回、条件の整った区域を追加指定する。

14　檜隈寺跡（ひのくまでらあと）【奈良県 高市郡（たかいちぐん） 明日香村（あすかむら）】

飛鳥時代に造営された古代寺院。有力渡来系氏族である東漢氏（やまとのあやし）の氏寺（うじでら）として重要。伽藍主要部は回廊に囲まれ、回廊の西辺に中門、南辺に金堂、北辺に講堂が取り付き、内部の中央東寄りに塔を配置するという特殊な伽藍配置をとる。今回、金堂と南面回廊について、条件の整った区域を追加指定する。

15　長崎原爆遺跡（ながさきげんばくいせき）【長崎県 長崎市（ながさきし）】

昭和２０年（１９４５）８月９日に長崎に投下された原子爆弾の被害を伝える遺跡。

爆心地、旧城山国民学校校舎、浦上天主堂旧鐘楼、旧長崎医科大学門柱、山王神社二の鳥居から成る。今回、爆心地に隣接する下の川と被爆樹木の樹叢が存在する山王神社境内を追加指定する。

16　小部遺跡【大分県宇佐市】

大分県北部の周防灘に面した平野部に立地する古墳時代前期を中心とする構造の変遷が明らかな集落遺跡。古墳時代前期初頭に環濠集落として出現し、前期前半に環濠内に方形区画と大型掘立柱建物を伴う居館へと変遷する。この時期の社会構造の変化を考える上で貴重な遺跡。今回、条件の整った区域を追加指定する。

17　塚崎古墳群【鹿児島県肝属郡肝付町】

鹿児島県の志布志湾沿岸に所在する古墳時代前期後葉頃から中期中葉まで営まれた古墳群。古墳文化の南限として重要。最南端の前方後円墳である５１号墳や地下式横穴墓が存在する可能性のある地区について、条件の整った区域を追加指定する。

《名勝の新指定》　１件

１　白水滝【岐阜県大野郡白川村】

白水滝は白山の主峰である御前峰（標高２，７０２ｍ）の山頂からおよそ５ｋｍ東方の標高約１，２００ｍ付近に位置する。約２，２００年前の白山の噴火で噴出した溶岩流によってできた平坦地から流れ落ちる直瀑で、落差は６７．４ｍある。

滝が落ちる断崖は安山岩から成り、滝口付近は水平方向に、滝壺付近は垂直方向に伸張した柱状節理が見られる。通常はおよそ２５０ｍ離れた「観瀑台」から観賞するが、安山岩の断崖を背にまっすぐ落ちる姿は豪壮で、滝口周辺にはヒノキ、ツガなどの針葉樹が、その周辺にブナ、ミズナラなどの落葉広葉樹が彩りを添えている。ミズナラには巨木が多く、胸高直径が２ｍを超えるものもある。それらを含む落葉広葉樹が色づく紅葉の季節の美しさはひとしおである。

白水滝は、近代以前から景勝地として知られており、現在までその姿を伝える。特徴的な地形及び地質によって形成される風致景観は優秀であり、その観賞上の価値及び学術上の価値は高く、名勝に指定し保護を図るものである。

《天然記念物及び名勝の新指定》　１件

２　サンニヌ台【沖縄県八重山郡与那国町】

サンニヌ台は、与那国島東部の南東岸に位置し、急崖や台地状の地形が約１．３ｋｍにわたって展開する岩石海岸である。連続する断崖と特徴的な階段状の地形は、砂泥互層の地層面と、地層を直線的に破断する節理と断層に沿って、風波による侵食や崩落が繰り返されて形成される。その地質は、ユーラシア大陸から運ばれた砂や泥等を起源とし、海底に生息した生物の多種多様な生活痕等（生痕化石）が極めて良好に保存されている。ウニ類や環形動物などの食べ歩き痕（移動摂食痕）、甲殻類の巣穴化石（居住痕）、魚類が海底に形成した凹地の化石（休息痕）などがある。また、断層は、その発達過程や要因を明らかにするために必要な構造が欠くことなく良好に保存されており、与那国島のみならず琉球列島の変遷を知るために貴重である。一帯のすぐれた風致景観は、東方に位置する軍艦岩、サンニヌ台、そこから１ｋｍ余り南西に続いて断崖を成すカニマチサヤと呼ばれる海岸、そして、西端の立神岩とそれに相対するウブイティディと呼ばれる海岸から成り、伝承なども語り継がれており、観賞上の価値が高い。

《天然記念物の新指定》　１件

１　西別湿原ヤチカンバ群落【北海道野付郡別海町】

ヤチカンバは、カバノキ科カバノキ属の低木で、主にユーラシア大陸北東部に分布し、国内では２か所にのみ隔離分布する氷期の遺存種である。大陸と日本列島が陸続きだった氷期には連続的に分布していたヤチカンバが、氷期後の温暖化による大陸との分断に伴い隔離されたと考えられている。西別湿原は、ヤチカンバの国内分布地のひとつとして良好なものであり、ミズゴケ群落がよく発達しイソツツジやガンコウラン、ヒメツルコケモモなど北海道東部の湿原に特徴的な種がよく見られる一方で、ヤチカンバの生育地という希有な特徴を有する。西別湿原におけるボーリング調査の結果から、亜寒帯針葉樹林に覆われていた最終氷期最盛期から落葉広葉樹林が広がった完新世までほぼ連続してヤチカンバが分布していたことが明らかになった。また、ヤチカンバの遺伝分析の結果からは、国内のヤチカンバ集団には遺伝的分化が認められなかった。大陸と北海道のヤチカンバの遺伝的分化は解明されていないものの、両者の間には葉の形質に明確な違いはなく、北海道のヤチカンバは主に栄養繁殖で増えるため隔離後の世代交代が限られていることから過去の遺伝的多様性をかなり維持していると考えられている。

これらのことから植物地理学的、遺伝学的に価値が高く、天然記念物に指定して一層の保護を図るものである。

《天然記念物の追加指定及び名称変更》　１件

１　石垣島平久保（いしがきじまひらくぼ）のヤエヤマシタン自生地（じせいち）【沖縄県石垣市（いしがきし）】

ヤエヤマシタンは、主にフィリピンやインドネシアに分布するマメ科シタン属の植物であり、石垣島北部の平久保には、北限の隔離分布地にあたる良好な自生地が見られる。これまでの巨樹としての保護に加え、稚樹（ちじゅ）や実生（みしょう）も対象に含め一層の保護を図るものである。